

問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

写真はとてもふしぎなメディアだ。これほど身近にありながら、多くのなぞを秘めたものも少ないのではないだろうか。しかも私たちはそのなぞをほとんど意識せず、日々(1)気楽に写真を撮り、眺め、暮らしている。

私の住むマンションは屋上に玄関があり、そこから街路に出るようになっていて、崖を背にして建っている。そういう構造なのだが、毎朝、仕事場に行くのに階段を上がり屋上のドアを開くとき、ふと写真を撮りたくなる。カメラを持っていれば実際に撮ることもあるが、撮りながらすでも何度か撮っているのに、と思う。撮ったところでそれをどうするあてもないのに、とも思う。にもかかわらず、またシャッターを押してしまう私がいる。

①メンミツに比較すれば細かなちがいはあるだろうが、(1)一見した印象はいつも同じ古ぼけたマンションの古ぼけた屋上で、なにひとつ目立つた変化は見いだせない。にもかかわらず撮りたくなるのはなぜなのか、いつもふしぎでならない。

撮るにも手もとにカメラが必要である。撮らなければならぬ必然性はないから、持っていないければ撮る行為にはおよばない。ということは撮りたくなるのはカメラが身近にあるからで、機械がそうしたAをうながしていることになる。

考えてみれば、マシンにはそんなふうには人の心を刺激するところがあるようだ。一度撮るとその手応えに②カンカされ、もつと撮ってみたいくなるのである。カラオケ・マシンが登場したとき、あんなにも歌うのが好きな人がたくさんいるとは、だれも想像しなかっただろう。人前で歌うことなど、プロか③ノドに自信のある人でないかぎりあり得ないと思っていたのに、とんでもなかった。はじめは恐る恐る握ったマイクを離さなくなる。伴奏するのが機械で、歌った結果がエコーの④キいたアンプから出てくるところがミソなのだ。人間の生っぽさが消えて意識が解放されるゆえに、興奮するのである。

カメラのシャッターを切るには人間だが、写真そのものを生みだすのは機械なのだ。「私」が撮ったのか、「機械」が撮ったのかが判然としない国境の⑤アイマイな場所に、写真の国は存在している。しかも撮るのに視覚を使うところが、問題をさらに複雑化させているように思われる。

五感をつかさどる器官のなかで、情報を受けとるだけでなく送ることができるのは、眼球である。外界を見ることのみならず、視線で訴えかけることができる。たとえば電車の中で他人の顔をじっと見つめれば、十中八九がこちらを振りむくにちがいない。だが、すぐとなりの人の会話を耳をそばだてたところで、気づかれはしないだろう。犬の耳は興奮すればピンと立っし、象は鼻を動かして気持ちを伝えるけれど、あいにく人間の耳や鼻はそういう作りにはなっていないのだ。

このように感覚器官のなかで(2)能動性をもった視覚は、朝目覚めて夜寝るまでフル稼働で網膜に像を映しだしている。そのすべてに反応していたら混乱するので、脳のフィルターが選別し、大方の像は本人の気づかないまま捨て去っている。脳の感覚領域の三分の一が視覚に⑥サかれていてことをみても、その作業の大変さが実感できるだろう。それほど多くの神経細胞を動員しなくては、見えたものを整理しきれないのだ。

B、カメラは肉眼とちがって選別をしない。レンズに映ったものをすべて採り込み、写真として吐き出す。これがカメラ・アイと肉眼との大きな差だ。その結果、カメラはこれまで(3)人が意識することのできなかった視覚領域を浮上させた。E・マインブリッジの撮った疾走する馬の動物写真があるが、昔の人はそれを見てはじめて障害物を越えるときに馬が四本の脚をどのように動かすかを理解したのだ。スポーツ選手がフォームの⑦シェウセイをはかるのに、静止画像を参照するのも同じ理由で、人の眼では認識できない動きを知ることができるから役立つのである。

なにに反応しているかわからずに撮った屋上の写真も、見返してみればそのときに気づかなかったものが発見できるだろう。ゴミ収集車が拾い忘れたスナックの袋とか、夏場よりも長い物の影とか、手すりにぶら下がっている意味不明のロープとか、そんなものが眼に入り、見逃したものの多さに驚くだろう。

このようにカメラ・アイは肉眼より圧倒的に多くの情報を写真に焼きつけるが、それを読みとるのがふたたび人間の眼球であることが、写真の問題をより込み入ったものにしていて、一度見たものをふたたび写真のかたちで見るとき、私たちの意識になんらかの変化が生じる。撮ったことを忘れていたとしても、まったく同じ状態で見るとは不可能だろう。脳細胞が見たものを選別しているといっても、本当に捨て去ったかどうかは不明で、無意識のどこかにひっかかって、やがて浮上してくるかもしれないのだ。【イ】人間の脳にはパソコンのように「削除したもの」を完全に消去する「という項目はない。過去に見たものが、いつどのようによみがえってくるかは予想がつかないものである。【ロ】人の眼に映るこの世の出来事は、ひとつも停止することなく、絶えず流動し変化している。しかもそれを見る肉体自信もたゆみなく細胞分裂を繰り返している。【ハ】ということとは、屋上の写真を撮ったときと同じ生命状態で見るとは、原理的にはあり得ない。【ニ】

具体的な例を引いて考えてみよう。
ここにパーティーの写真が一枚あったとする。みんな楽しそうに笑っている。ところがもしそこにいる友人のひとりとその後に気まづい関係になったなら、その写真はもうパーティーの能天気な気分とは結びつかず、苦くて複雑な思いを引き出す証拠品となるだろう。【ホ】もつと極端な例では、もし写っているだれかがパーティーの帰り道で事故死でもしたならば、そこに不吉な⑧ヨチヨウを読みとるかも知れない。

生きていく人間の意識は、C心臓のように、いつときも止まらず変化している。周囲の出来事や社会的事件、自分の体調や感情など無数の理由に揺れ、変動している。それに影響されずに写真を見ることは不可能だ。いや、厳密には写真だけでなく、外界の物象にそがれる視線に二度と同じものはないのだが、日常生活では(4)そういうことは考えない。生死の瀬戸際に立たされていたり、熱烈な恋愛をしていたりという特別な精神状態のときにそうなることはあっても、ふだんはいま見ているこの光景と一瞬間の光景は同一だと見なし暮らしている。そうでなければ精神不安に⑨オチイってしまうだろう。

ところが(Ⅱ)写真を見ると、私たちは決してあともどりでできない時間の宿命、それがもたらす意識の揺らぎに、はたと気づかされることがある。身体的には認知し得ない一瞬を定着させた二次元の像であるゆえに、その秘密が明かされてしまうのである。写真を見るときという行為には、それゆえに(Ⅲ)生きてきた時間がいやおうなく重なってきた。⑩イトするとしなやかにかかわらずそうなる。撮る行為以上にそうだろう。撮るのは一瞬だが、見ることは何度でもとれるから、そのたびに変化する自分を見いだすはずだ。

一枚の写真を五十人の人に見せて感想を求めると、五十通りの答えがもどってくる理由も、それを考えれば理解できるだろう。写真の見方にDの解答はなく、正否を超えた領域に言葉が飛び散っていく。年齢、育った環境、文化、国籍と、見る人の幅を拡大させていけばいくほど、感想の幅も広がるのである。

(大竹昭子「彼らが写真を手にした切実さ」より。なお、本文の一部を省略・変更してある。)

問1 二重傍線部①～⑩のカタカナ部分を漢字で書きなさい。

問2 傍線部(1)「気楽に」と同じ意味の表現を本文中から、五字以内で抜きだしなさい。

問3 波線部(Ⅰ)とあるが、その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 写真はなんの手間をかけることもなく、一瞬にして現実をそのまま映し出すから。

イ 写真は肉眼が見逃している細部まで残らず映し出すから。

ウ カメラという機械が身近にあるために、写真を撮りたいという気持ちが起こってくるから。

エ カメラという機械が扱いやすくなって、簡単に撮ることができるようから。

問4 **A**、**D**に入れるのに、最も適当なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

A ア 期待 イ 思惑 ウ 衝動 エ 情熱 オ 目的 カ 願望

D ア 唯一無二 イ 二律背反 ウ 二束三文 エ 千差万別 オ 大同小異 カ 同工異曲

問5 傍線部(2)とあるが、筆者は人間の「視覚」を、どのような性質のものと考えているか。

それが具体的に述べられている部分(本文中の二十字以内)の、初めと終りの五字を抜きだしなさい。

問6 **B**、**C**に入れるのに、最も適当なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

ア ところで イ すなわち ウ つまり エ また

オ いっぽう カ ことさら キ あたかも ク とりわけ

問7 傍線部(3)とあるが、「人」が「意識すること」ができない理由を、解答欄に合うように本文中から三十五字以内で抜きだしなさい。

問8 次の一文は、本文中の「イ」～「ホ」のどこに入れるのが最も適当か。記号で答えなさい。

つねにそこにはあともどりできない時間が挟まっているのだ。

問9 傍線部(4)とは何か。本文中から二十五字以内で抜きだしなさい。

問10 波線部(Ⅱ)とあるが、その理由として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 写真によって過去のできごとを思い出すから。

イ 写真は人間の感覚では捉えられない一瞬を定着させているから。

ウ 写真を撮る時は一度だが、見るのは何度でもできるから。

エ 写真は見たものを取捨選択しないから。

問11 波線部(Ⅲ)とあるが、その説明として、最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人間の意識は無数の条件によって絶えず変動しているため、写真を見るたびに受ける印象はいつも違うものとして感じられるということ。

イ 人間が外界から得た情報は無意識のうちに脳内に蓄積されており、写真の解釈には自ずとそれまでの体験が反映されてしまっているということ。

ウ 人間の視線には完全に同じものはないため、写真を撮ったときの自分と今それを見ている自分とは違うものとして認識されるということ。

エ 人間が肉眼で把握している外界は常に変化しており、写真のかたちになって初めてこれまで見逃してきたものの多さに気づくということ。

オ 人間の視覚は見たものをそのまま記憶の中に取り込んでいるため、写真を見返すとふと過去の出来事が思い起こされてしまうということ。